

三浦へは「海」からきやっせー

筆者は、「海」に魅せられて25年余り、あちらこちらの「海」へ通っている。その中でも沖縄県「八重山諸島」への思いが強いのであろう、最近はそのらへばかり足が向いてしまう。これらの島々へは沖縄県第二の都市である石垣市、つまり石垣島から定期連絡船で行くのであるが、これも旅の楽しみの一つになっている。

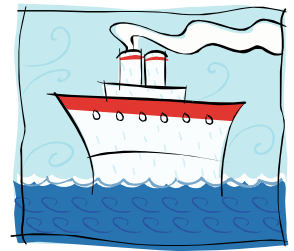
孫を連れた「おじい」、「おばあ」が食料品を入れたダンボール箱を持って乗船していることもあるし、ブランドもののポストンバックを持った新婚ホヤホヤらしきカップルに出くわすこともある。また、自転車で日本一周を目指しているような髭をぼうぼうと伸ばした輩や大荷物を持ったダイビングチームとも船を同じくすることもある。異邦人である筆者の脳味噌が南国特有のスローな雰囲気侵されてしまうのであろうか。一見不協和音のような乗り合わせが、混ざり合って溶け込んでいて、眺めていて妙に心地良いのである。

ところで、今年の9月から10月にかけて、東京湾内において、二つの海上交通実証実験が行われたことをご存知だろうか。一つは東京、横浜、千葉を結ぶ航路であり、もう一つは横浜の河川や港内を巡る水上タクシーである。少し余裕を持った、楽しみを持った交通機会の提供という意味では、これらの取組は、第二の人生を謳歌するであろう団塊の世代の大量退職が迫っている中、有意義なことではなからうかと思う。

— 浦市においても、国道1号線、134号線のバイパスを海上に構築して、三浦市がその結節点たらんことを、平成19年度施政方針で述べており、第4次総合計画第2次実施計画事業としても「海上交通実験プロジェクト事業」を掲げている。

筆者は、この事業の担当をしており、国土交通省へ幾度か事業応募し、その都度首都圏の船会社に提案を持ち込んでいるが、良好な人間関係の構築止まりであり、首都圏から三崎漁港へ旅客船を呼び込むことについては、残念ながら順調に進んでいるとは言い難い状況である。また、このような中で、城ヶ島と油壺を結ぶ観光連絡船が今年15日をもって休航されたことは、本事業を担当するものとしては寂しい限りである。

かつて、内陸交通が脆弱な頃は、三崎にも旅客船が入っており、かの「城ヶ島の雨」の作者である北原白秋氏も最初の三崎来遊は船旅であったと聞く。昭和30年代から40年代にかけては、多くのカツオ船やマグロ船などが水揚げに入港して、三崎漁港が、三崎の町が隆盛を誇っていた時期もあった。



当時の状況は、書籍や伝聞によってしか知る由がないが、この「海上交通実験プロジェクト事業」を是非とも成就させ、三浦へのお客様の第一歩が「海」から三崎で印され、共に賑わって、喜んで満足したお客様の笑みを自分の目で見てみたいものである。

(政策経営課 楠本育男)

「ぼっこすこせえる」とは・・・

神奈川県三浦市には三崎弁と呼ばれる方言があります。「ぼっこす」は「ぶち壊す」の意味、「こせえる」は「こしらえる」という意味です。つまり、「ぼっこすこせえる」は「ぶち壊し、こしらえる」=スクラップ&ビルドという意味になります。

次号(第18号)は1月17日発行です。

暴論オピニオン

三浦市政策経営課では、行政経営全般について日頃から様々な無責任放談をしています。このコーナーではその放談の中で飛び出した暴論をご紹介します。両手を挙げて賛成できないまでも発想のヒントくらいにはなるでしょう。

政策経営課をぶっ壊せ！

筆者は、現在、行革推進担当の職務を担っているが、仕事柄、市役所庁内の職員と会話をする機会が多々ある。その中で、時折聞かれる話は、「政策経営課の職員を庁内各課に回して欲しい。」である。庁内各課は、職員数計画に基づき職員が削減される中、様々な工夫をして対応しているが、例えば「画期的なITシステムの導入等によって劇的な人員削減を図って対応」という構図があるかという、財政難の中、それもままならないというのが現状である。人財も減らされ、予算も付かない状況下において、政策経営課という部署が「無駄」に写ってそのような発言となるのであろう。

政策経営課は、平成 18 年 4 月 1 日に、かつての政策経営室と企画情報課の一部が合体して創設された課であるが、斯く言う筆者も、この前身である「政策経営室」に対しては、ほぼ同様の印象を持っていた。(筆者は、政策経営課創設時の平成 18 年 4 月に政策経営課に配属された。)

当時を思い起こすと、現在の権能である企画調整機能を持たない「政策経営室」であったことから、当然、政策研究的色合いが強く、異色であり、筆者が「市役所の中の大学」というイメージで抱いていたことが思い出される。独りよがりの発想かもしれないが、就職したにも拘わらず「仕事」ではなく、何故、公費で「研究」、「勉強」をするのかと感じていたのである。

現状とその時点での状況に差異はあっても、筆者も一時はそう感じていた時期もあることから、前出の時折聞く「話」の中にあるその気持ちは分からないでもないが、我社(本市)の現状を大所高所から考察をしていただきたい。我社(本市)の状況を物語る一つとして、一般会計における経常収支比率^(注)があるが、これがかなりの高率で県下都市ワースト第 1 位の不名誉が何年も続いているのである。かなり「ヤバイ」状況ではないだろうか。

説明が長くなったが、現在の政策経営課は、政策論展開は勿論であるが、市役所庁内の事業の進行管理が大きな仕事となっている。そして、この進行管理が「厄介」なのである。中には困難な仕事もあり、進捗しないということもあるが、人はやりたくないことは、無意識に後回しにしまうため、困難な仕事や不得手な仕事は後回しとなり、これに「お節介」を焼く担当が必要になってしまうのである。

政策経営課が「無駄」であると感じている職員に申し上げたい。「お節介」を焼かれなくても、自己管理や自己改革により、困難な仕事であっても不得手な仕事であっても、これを自ら進捗していくことができるようになれば、少なくとも政策経営課の「お節介」担当業務は不要になって、経



費削減を図ることはできるのである。

是非とも、「政策経営課」をぶっ壊して欲しいものである。

(注) 経常収支比率 地方公共団体の経常的経費のために経常一般財源がどれだけ充当されたかを示す比率である。これは、当該地方公共団体の経常一般財源の硬直度、あるいは逆に余裕度を示すものであり、通常財政構造の良否を判断する指標に使われている。



三浦市長の吉田ひでおです。11月23日から25日の三日間、廃校になった市内の高校を使って、BONNIE PINKさんやサンプラザ中野さんをはじめとする多くのプロ・ミュージシャンによる「ロックの学園 with 三浦芸術祭 vol.1」を開催しました。「体育館ライブ」や「ロックの授業」、「三崎ライブハウス」など、多彩なイベントが繰り広げられ、三日間で6,534人ものお客様をお迎えしました。都心から近すぎず遠すぎずといったロケーションが、非日常性と日常性をうまくつなぐ格好の条件になっているのだと思います。こうした条件を活かして市外からお客様を迎え入れるビッグイベントを増やしていけば、三浦の新しい地域経済のかたちが見えてくるかも知れません。「ロックの学園」の様子は1月28日からの三日間、23時から90分にわたってNHK・BS-hiにて放映されるそうです。是非ご覧ください、当日の雰囲気をお楽しみください。